

令和 2 年 度

# 一般入学試験

## 国 語

時間： 50分  
満点：100点

### 受験についての注意

- 1 試験開始の合図があるまで、問題用紙を開かないでください。
- 2 問題用紙は11ページ、問題は一～三まであります。
- 3 開始の合図があったら、まず解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。
- 4 試験中、問題用紙の印刷が見えにくい、または文章等で不明な点がある場合は、手をあげて監督者に知らせてください。ただし、問題に関する質問には、いっさいお答えできません。
- 5 各問題とも、解答は解答用紙(別紙)の所定欄に記入してください。
- 6 終了の合図があったら、ただちに筆記用具を置き、監督者の指示にしたがってください。
- 7 解答用紙だけ回収します。問題用紙は持ち帰ってください。

一次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

高齢化社会ということもあつてか、「健康にいい」「からだにきく」という触れ込みの食品、サプリメント、健康術やグッズなどを生活に取り入れる人は増える一方、健康ビジネスも拡大している。サプリメントだけでも、その市場は五〇〇〇億円強と言われ、中には「今後、成長して二兆円に達する」という見方さえある。

しかしその一方で、どう考えても「ちゃんとしている」とは言えないのではないか、というものも少なくない。たとえば、いくら医学博士が開発したと言われても、「瞬時に脳のバランスを調整し、エネルギーを増強する音楽のCD」「宇宙エネルギーを活用した水活性器」などの効果が科学的に実証されているとは思えない。

物理学者の菊池誠氏は、マイナスイオンなど、すでにその実証性が証明されているかのようにアツカ<sup>A</sup>われているものも含め、「見かけは科学のようだが実は科学ではない」と思われる考え方や商品を「ニセ科学」と呼んで、厳しく批判する。菊池氏は、こういったものに群がる人はあくまでそれを「科学」として受け入れている、と主張する。「科学」そのものへの信頼性はむしろ上がっており、その中で「ニセ科学」は結論がはっきりしているだけに「科学」以上に「科学的」に見えるため、「これこそ科学の粋！」とばかりに信じられてしまふ、と言うのだ。たしかに、利用している人たちはこれが「医学博士」「大学教授」などが認めたものであると説明し、信用しようとしなければ科学的ではなくて「科学を知らない」のだ、という態度を取る。

A、本当に人はこういった「実は科学的実証性がはっきりしない商品や情報」を、「科学的だから」という理由で信用しているのだろうか。中には、そうではない人もいるような気がする。なぜなら彼らは、「大学教授」が開発したという以上には、その科学的根拠を追究しようとしなからだ。「大学教授」という文字を見たたん、一種の思考停止に陥り、あとはいくら菊池誠氏のような<sup>B</sup>本当の科学者がその不確かさを証明して見せたとしても、それを受け入れようとはしないだろう。

そしてそこには、「考えたくない」と同時に、「信じたい」という気持ちも働いている。せっかく「これなら効きそう」と思って選んで買ったのなら、最後の最後まで「よい買い物をした」と思いたい。「失敗した」「だまされた」と思うと、自分自身までが否定されたような気分を味わうからだ。だから本当のところは、その実際の効果になどそれほど関心がないのかもしれない。「よいサプリメントに出合った」「私にはこの健康術が合っている気がする」という満足感と、「そういうものを選べる私はけっこうラッキーだ」という自己肯定感が大切なのだ。せっかくそれらを得られて、自分が向上、前進しているような気になっているのに、「それは「ニセ科学」です」などと言う人は、野暮なジャマ者にしか見えないかもしれない。B、実は効果そのものには、それほど関心が払われているのではない。健康によさそう

なモノを使っている自分、健康に気を使っている自分に満足しているのだ。あるいは、常に健康に注意を払っていないと気がすまないのかもしれない。

しかし、高額なお金を出して効果のはっきりしない商品を買ったりサービスを受けたりして、「私ってラッキー」とよい気分になれば、それでよいのだろうか。もちろん、そういうよい気分にはなれないよりはなつたほうがいいのかもしれない。しかしそれを「私は科学の恩恵を受けている」と思うのは、二一世紀を生きる人間としてはあまりに悲しい。

農林水産省が二〇〇七年度から、「老化防止が期待できるトマト」や「血圧上昇を抑える成分が豊富なお米」など、新しい食材や素材の研究開発や商品化に本腰を入れるという計画を発表した。指定された食材は七種。またすでに、花粉症緩和に効果があるメチル化カテキンを普通の緑茶の数十倍も含むお茶「べにふうき」などが商品化され、一定の人気を集めているのだという。農林水産省のお墨付き健康食品となれば、消費者も信頼して購入するだろうが、成分と効能との医学的因果関係が人体レベルではっきりと実証されたわけではない。

ではなぜ、農林水産省がこれらの食品開発に踏みきったのか。農水省は、国民の健康の向上を考え、より科学的な食品をソツセン<sup>E</sup>して開発しようとしてくれているのだろうか。<sup>③</sup> どうもそうとも言い切れないようだ。

こういった新食材・素材の現在の市場規模は二〇〇億円とされている。農林水産省の見込みでは、五年で三倍以上の七〇〇億円規模にまで拡大するのが目標だという。有効成分の含有量などを厳密に検査したお墨付き<sup>④</sup>の食材のみ出荷する、としているが、そのトマトの「リコピン含有量」は確実に高かったとしても、それが実際の「老化防止」につながる、というところまで農水省が保証してくれているわけではないのだ。また農水省は、国民の健康増進のためにこういう食材を売り出すのではなく、「高い付加価値で輸入農産物との差別化を図り、農業を支援する」ことが狙いのようなのだ（『朝日新聞』二〇〇六年八月二八日付より）。

こう考えると、この健康食材の目的も、結局は「売り上げを上げること」なのか、という気もしてくる。「健康」に関心を持つのは悪いことではないが、「あの博士がすすめるのだから確実」「官庁が開発したのだから効果は抜群」と信用しすぎて、よいお客さん<sup>⑤</sup>になりすぎないよう、常に注意は必要だ。

香山<sup>かやま</sup>リカ 『悩み』の正体 一部略より

問一 二重傍線部A～Eのカタカナは漢字に直し、漢字には読みがなをつけなさい。

問二 空欄部A・Bに入る語の組み合わせとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア A それでは B たとえば
- イ A ところが B さらに
- ウ A しかし B 要するに
- エ A また B なぜなら

問三 傍線部①「ちゃんとしている」とあるが、ここでの意味を、次の文の空欄を埋める形で本文中から十五字以内で抜き出しなさい。  
 こと。

問四 傍線部②「いくら菊池誠氏のような、~~本当の~~科学者が、その不確かさを証明して見せたとしても、それを受け入れようとはしない」とあるが、その理由として不適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「彼ら」は、実際の効果に関心はそれほどなく、よいサプリメントや健康術を見つけたことで満足し、自分を肯定したいから。
- イ 「彼ら」は、結論がはっきりしているものは「科学」以上に「科学的」であると、医学博士や大学教授から教わっているから。
- ウ 「彼ら」は、科学的根拠について考えたくないと思うのと同時に、その実際の効果を信じたいという気持ちも抱いているから。
- エ 「彼ら」は、常に健康に注意を払っていないと気が済まず、自分が健康に気を使っていると思うことで自分に満足しているから。

問五 傍線部③「どうもそうとも言い切れないようだ」とあるが、筆者がこのように述べる根拠は何か。「拡大」「支援」という語句を用いて、次の文の空欄を埋める形で六十字以内で答えなさい。

と言われていること。

問六 傍線部④「そのトマトの『リコピン含有量』は確実に高かったとしても、それが実際の『老化防止』につながる、というところまで農水省が保証してくれているわけではない」とあるが、どういうことか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア そのトマトが実際にリコピンを含有しているかどうかは証明されおらず、リコピンの含有量と老化防止との関係についても農水省は何一つ説明していない、ということ。

イ そのトマトの「リコピン含有量」が実際に高かったとしても、リコピンの含有量と老化防止との間には医学的因果関係はないとい

う事実を農水省は隠している、ということ。

ウ そのトマトは「リコピン含有量」が高いので老化防止に役立つという説明は、科学的に見えるが実はニセ科学であり、農水省はニセ科学で国民を操ろうとしている、ということ。

エ そのトマトはたしかにリコピンを多く含んでいるのであろうが、農水省は、そのことが実際に老化防止に効果があると医学的に証明されているとは言っていない、ということ。

問七 本文の内容と一致しているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「ニセ科学」のことを、見かけは科学的でも実は科学ではないもののように言う人がいるが、「ニセ科学」にも根拠があり、科学を本当に知っている人なら「ニセ科学」を一方的に批判するようなことはしない。

イ 健康によいといつて売られている商品は増え、健康ビジネスも拡大しているが、医学博士や大学教授による効果の説明のほとんどが「ニセ科学」であるため、私たちはだまされないようにすべきである。

ウ 「ニセ科学」による商品を買ったりサービスを利用したりする人は、自分が見つけたものが自分に合ったよいものだと思いたい気持ち強い一方、効果そのものについてはあまり気にかけていない可能性がある。

エ 今、農林水産省が研究開発や商品化に本腰を入れようとしているものは、官庁が開発したものなら人々は信用しやすいということを利用していただけで、実際には「ニセ科学」によるものといつてよい。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

(これまでのあらすじ) 中学1年の祐也は、小学校3年のときから始めた将棋に夢中で、兄の秀也が国立大学の医学部に進学すると、勉強では兄にとってもかなわないので、自分は絶対に棋士になると誓った。しかし、負けたくない気持ちが強すぎて、思うように将棋が指せなくなっていった。いつも将棋のことを考えているために学校の成績も下がり、焦りを感じるためにさらに将棋で失敗するようになって、自分より力は下だと思っていた野崎君にも初めて負けてしまった。

祐也は、野崎君に密かに感心していた。D2では、奨励会試験に合格するのはかなり難しい。野崎君はもう中学2年生なのだから、かりにこのままのペースで昇級したとしても、合格ラインであるC2にあがるのは1年後だ。奨励会へは6級で入会するのが普通だから、高校1年生での入会では、2歳の誕生日までに初段というハードルはまず越えられない。

つまり野崎君は祐也以上に焦らなければならぬはずなのに、いまもひとり黙々と詰め将棋を解いている。その落ち着いた態度は、祐也がまねしたくても、まねようのないものだった。

やがて1時15分が近づき、ひとりまたひとりと対局場である大広間にむかっていく。祐也も桂の間を出て盤の前にすわったが、とたんに緊張しだして、呼吸が浅くなるのがわかった。

3局目の将棋も、まるでいいところなかった。飛車を振る位置を三度も変える体たらくで、かつてなくみじめな敗戦だった。

4局目も、中盤の入り口で、銀をタダで取られるミスをした。祐也は大広間から廊下に出て、頭を抱えた。

「祐也」

呼ばれて顔をあげると、三和土に背広を着た父が立っていた。

「どうした？」

心配顔の父に聞かれて、祐也は4連敗しそうだと言った。

① 「そうか。それじゃあ、もう休もう。ずいぶん、苦しかったろう」

祐也は父に歩みよった。肩に手を置かれて、その手で背中をさすられた。

「挽回できそうにないのか？」

手を離れた父が一步さがって聞いた。

「無理だと思う」

祐也は目をフセ<sup>A</sup>た。

「そうか。それでも最後まで最善<sup>B</sup>をつくしてきなさい」

「わかった」

父に背をむけて、祐也は大広間に戻った。どう見ても逆転などあり得ない状況で、こんな将棋にしてしまった自分が情けなかった。

10手後、祐也は頭をさげた。次回の、今年最後の研修会で1局目から3連勝しないかぎり、D1で2度目の降級点がつき、D2に落ちる。これでは奨励会試験に合格するはずがない。しかし、そんなことよりも、いまのままでは、将棋自体が嫌いになりそうで、それがなによりこわかった。

祐也はポデューバッグを持ち、大広間を出た。

「負けたのか？」

父に聞かれて、祐也はうなずいた。そのまま二人で1階まで階段をおりて、JR千駄ヶ谷<sup>せんだがや</sup>駅へと続く道を歩いていく。いきには気づかなかったが、街はクリスマスの飾りでいっぱいだった。

②「プロを目ざすのは、もうやめにしなさい」

祐也より頭ひとつ大きな父が言った。

③「2週間後の研修会を最後にして、少し将棋を休むといい。いまのままだと、きみは取り返しのつかないことになる。わかったね？」

「はい」

そう答えた祐也の目から涙が流れた。足が止まり、あふれた涙が頬<sup>ほほ</sup>をつたって、地面にぼとぼと落ちていく。胸がわななき、祐也はしゃくりあげた。こんなふう泣くのは、保育園の年少組以来だ。身も世もなく泣きじゃくるうちに、ずっと頭をおおっていたモヤが晴れていくのがわかった。

「将棋をやめろと言っているんじゃない。将棋は、一生をかけて、指していけばいい。しかし、おととしの10月に研修会に入ってから、きみはあきらかにおかしかった。おとうさんも、おかあさんも、気づいてはいたんだが、将棋については素人<sup>しょうと</sup>同然だから、どうやってとめていいか、わからなかった。2年と2ヵ月、よくがんばった。今日まで、ひとりで苦しませて、申しわけなかった」

父が頭をさげた。

「そんなことはない」

祐也は首を横にふった。

「たぶん、きみは、秀也が国立大学の医学部に現役合格したことで、相当なプレッシャーを感じていたんだろう」

父はそれから、ひとの成長のペースは千差万別なのだから、あわてる必要はないという意味の話をした。

千駄ヶ谷駅で総武線に乗ってからも、父は、世間の誰もが感心したり、褒めそやしたりする能力だけが人間の可能性ではないのだということを知りやすく話してくれた。

「すぐには気持ちを切り換えられないだろうが、まだ中学1年生の12月なんだから、いくらでも挽回はきく。高校は、偏差値よりも、将棋部があるかどうかで選ぶといい。そして、④ ⑤ 錦糸町駅きんしちやうで乗り換えた東京メトロ半蔵門線はんざうもんのシートにすわるなり、祐也は眠りに落ちた。

午後6時すぎに家に着くと、玄関で母がむかえてくれた。

「祐ちゃん、お帰りなさい。お風呂が沸いているから、そのまま入ったら」

いつもどおり、張り切った声で話す母に、祐也は顔がほころんだ。

C 浴槽につかっているあいだも、夕飯のあいだも、祐也は何度も眠りかけた。2年と2ヵ月、研修会で戦ってきた緊張がとけて、ただただ眠たかった。

⑥ 悲しみにおそわれたのは、ベッドに入ってからだ。

「もう、棋士にはなれないんだ」

祐也の目から涙があふれた。布団ふとんをかぶって泣いているうちに眠ってしまい、ふと目をさますと夜中の1時すぎだった。父と母も眠っているらしく、家のなかは物音ひとつしなかった。

常夜灯がついた部屋で、ベッドのうえに正座をすると、祐也は将棋をおぼえてからの日々を思い返した。米村君はどうしているだろう。中学受験をして都内の私立に進んでしまったが、いまでも将棋を指しているだろうか。いつか野崎君と、どんな気持ちで研修会に通ったのかを話してみたい。

祐也は、頭のなかで今日の4局を並べ直した。どれもひどい将棋だと思っていたが、1局目と2局目はミスをしたところで正しく指していれば、ユウセイDに持ち込めたことがわかった。

「おれは将棋が好きだ。プロにはなれなかったけど、それでも将棋が好きだ」



うそ偽りのない思いにからだをふるわせながら、祐也はベッドに横になり、深い眠りに落ちていった。

佐川光晴さがみつはる『駒音高く』より

注1 D2 … 将棋の研修会のクラスの一つ。研修会は、最下位のF2から最上位のA1の十二クラスからなり、会員は、研修会の例会での対局の成績によって順次昇級する。A2に昇級した時点で十五歳以下であれば、奨励会6級に編入できる。奨励会では、下から6級〜1級、初段〜四段と上がっていき、四段でプロ棋士になるが、二十一歳の誕生日までに初段にならなければならない。

問一 二重傍線部A〜Eのカタカナは漢字に直し、漢字には読みがなをつけなさい。

問二 波線部ア〜エのうち、活用形の違うものを一つ選び、記号で答えなさい。

問三 傍線部①「そうか。それじゃあ、もう休もう。ずいぶん、苦しかったろう」とあるが、こう言ったときの父の考えとして最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 以前から祐也が将棋に夢中なのを好ましくないと考えていたので、今がやめさせる絶好の機会だと思った。

イ 祐也がプロになろうとして一人でがんばりすぎていたことに気づき、祐也を楽にしてやりたいと思った。

ウ 祐也が将来確実にプロの棋士になるためにも、スランプのこの時期に無理に続けさせるのはよくないと思った。

エ 将棋の世界の厳しさがわかったので、祐也をそんな世界からどうしても抜け出させなければならぬと思った。

問四 傍線部②「プロを目ざすのは、もうやめにしなさい」とあるが、こう言った父は、祐也にどういうことを教えようとしたか。本文中から三十五字以上四十字以内で抜き出し、その初めと終わりの各五字を答えなさい。

問五 傍線部③「はい」とあるが、このとき祐也が「はい」と答えたのは、父の「取り返しのつかないことになる」という言葉に祐也なりに納得したためだと考えられる。このとき祐也が考えたこととして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア これ以上将棋を続けては、勝てないだけでなく、学校の成績がさらに下がって遅れを取り戻せなくなる、ということ。

- イ 今このまま研修会に出続けても勝てず、そうなれば今後奨励会試験に合格するチャンスがなくなる、ということ。
- ウ 今このまま無理に将棋を続けられ、さらに負け続けるだけでなく、将棋が嫌いになってしまいかねない、ということ。
- エ 今将棋を続けても奨励会試験に合格できるはずはなく、そうなればさらに自信を失って立ち直れなくなる、ということ。

問六 空欄部  ④ に入る語句として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分なりの将棋の楽しみかたを見つくるんだ
- イ プロ棋士になるために自分を鍛えなおすんだ
- ウ 勉強と将棋をきちんと両立させていくんだ
- エ プロ棋士になる前に勉強をしつかりやるんだ

問七 傍線部⑤「錦糸町駅で乗り換えた東京メトロ半蔵門線のシートにすわるなり、祐也は眠りに落ちた」とあるが、このとき祐也が急に眠くなったのはなぜか。本文中の語句を用いて、五十五字以内で説明しなさい。

問八 傍線部⑥「悲しみにおそわれたのは、ベッドに入ってからだ」とあるが、この時点以降の祐也の気持ちの変化を述べたものとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 今日の対局の始めな結果を思い起こし、情けなくてたまらなかったが、対局の内容を冷静に反省していると、将棋が好きだという気持ちがよくえり、再び将棋に対する意欲がわいた。
- イ しばらく将棋を休むと決めたことで、プロ棋士になる道が断たれたと思うとつらかったが、振り返ってみて、将棋が好きだという気持ちを確かめるうちに、落ち着くことができた。
- ウ 父に言われるままにプロ棋士になるのをあきらめたことが悔しかったが、自分を客観的に見つめたことで、将棋は好きだがプロになる力はないと自分でも納得し、完全にあきらめがついた。
- エ もうプロになれないと思うと寂しく感じたが、自分と向き合ううちに、自分は本当はプロ棋士になりたかったわけではなく、ただ将棋が好きただけだと気づくことができ、心が晴れた。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる」と、人のいひけるに、「山ならねども、これらにも、猫の経<sup>へ</sup>上<sup>あが</sup>りて、猫またに成りて、年をとつて

人とする事はあなるものを」と云ふ者ありけるを、何阿弥陀仏<sup>なにあみだぶつ</sup>とかや、連歌しける法師の、行願寺の辺<sup>あたり</sup>にありけるが、聞きて、ひとり歩<sup>あり</sup>かん

身は、心<sup>①</sup>すべきことにこそと思ひけるころしも、ある所にて夜更<sup>ふ</sup>くるまで連歌して、ただひとり帰<sup>かへ</sup>りけるに、小川の端<sup>はた</sup>にて、音に聞きし猫

また、あやまたず足もとへふと寄り来て、やがてかきつくままに、頸<sup>くび</sup>のほどを食<sup>A</sup>はんとす。まさしく

肝心<sup>きんごころ</sup>も失せて、防がんとするにも力もなく、足も立たず。小川へ転び入りて、「助けよや、猫また、よやよや」と叫<sup>③</sup>べば、家々より、松たいまつを

どもともして走り寄りて、見れば、このわたりに見知れる僧なり。「こはいかに」とて、川の中より抱<sup>おこ</sup>き起したれば、連歌<sup>注1</sup>の賭物<sup>かけもの</sup>取りて、

扇・小箱など懐<sup>ふところ</sup>に持ちたりけるも、水に入りぬ。希有<sup>けう</sup>にして助かりたるさまにて、這<sup>は</sup>ふ這<sup>は</sup>ふ家<sup>B</sup>に入り<sup>は</sup>にけり。まず助からないところをかううして助かったという様子で

飼ひける犬の、暗けれど主を知りて、飛び付きたりけるとぞ。

『徒然草』より

注1 賭物 … 勝負事で懸ける品物。懸賞品。

問一 波線部A「食はんとす」、B「入りにけり」の主語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 猫また      イ 猫      ウ 人      エ 法師

問二 傍線部①「心すべきこと」とあるが、法師が思った内容として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 猫またというものがいて人を食うなどと人々は言っているが、そんなうわさに惑わされないよう心を引き締めなければならない。
- イ 以前は奥山にいた猫またが、今はこのあたりにもいるそうなので、もし一人で歩いているときに見つけたら逃げた方がよい。
- ウ このあたりでは猫が年をとると猫またになって人を食うそうだから、夜になってから外を出歩くようなことはしない方がよい。
- エ 猫またがこのあたりにもいて人を食うそうだから、一人で歩くときには襲われないようによくよく気をつけなければならない。

問三 傍線部②「思ひけるころしも」を現代仮名遣いに改めて、すべて平仮名で書きなさい。

問四 傍線部③「猫また、よやよや」とあるが、法師が「猫また」だと思ったものは何だったか。本文中から五字以内で抜き出しなさい。

問五 本文の内容と一致しているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 法師は、人々が言う猫またというものは年をとった猫のことだと思っていたが、襲われて初めて、猫ではないことを知った。
- イ 人々は、猫またが奥山だけでなくこのあたりにも出て人を食うとうわさしていたが、その正体は家々で飼っている犬だった。
- ウ 法師は、連歌の集まりの帰り道で、猫またに襲われたと思って小川に転げ落ち、連歌の賭物を川に落としてしまった。
- エ 法師は、猫または奥山にいるものと思っていたが、猫が年をとって猫またになって人を食うと言った者がいたので、驚いた。